グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2002年8月17日－8月29日）

高槻市立樫田小学校　教頭　**藤本政信**

はじめに

これからの学校においては、国際化、情報化、個々人の価値観の多様性等の変化の激しい社会に対応できる「生きる力」を子ども達に育成することが大切である。現在、社会から強く求められているのは、学校の自主性・自律性と特色ある学校教育の展開である。

このような時代の流れや社会の要請を受けて、学校に関係する法律・規則の改正、さらに、今年度から新学習指導要領による学校教育が始まった。

各学校は、学校の自主性・自律性を図りながら特色ある学校教育を展開していくのであるが、うっかりしていると他の学校に先を越され、自校の特色であったはずの取り組みが、全国どこでも行っている取り組みになりかねない。

そこで、本校では、国際理解教育の一環として、アメリカ・ノースカロライナ・ウイルミントンにあるバージニア・ウイリアムソン小学校（大阪教育大学の紹介で昨年の6月30日に鳴門教育大学で教育交流校の締結を行った。）との訪問交流を通してアメリカの教育と日本の教育の異質性について研究し実践することにより、本校の特色ある学校教育に独自性を見いだそうと考えた。

ウイリアムソン小学校視察の視点

＜アメリカの自己主張できる子ども達＞

本校の子ども達は、全校児童28名ということと生まれてから現在まで同じメンバーで育ってきていることから、あまり討論しなくても相手の気持ちがわかってきている。

アメリカの子ども達は、一人一人が自己主張できると聞いている。これは、国民性なのか？ そうであるとするならば、家庭教育のたまものである。または、学校教育の成果である。このあたりをアメリカの子ども達を通して学んできたいし、教師から話を聞きたい。そして、本校の子ども達の教育に生かせていきたい。

＜アメリカの人権教育＞

アメリカは、多民族国家である。学校の中でもきっと多くの民族の子ども達が、通学してきている。想像ではあるが、差別・偏見あるいは、それに伴ういじめ・不登校等が起こっていると考えられる。アメリカの人権教育は、どのように行われているのか、観たり、聴いたりしたい。日本も、国際化がもっと進み、どんどんと多民族国家になっていくので、アメリカの考え方を学んでおきたい。

＜アメリカの効果のある学校づくり＞

アメリカでは、学校教育目標を達成するために、校長が自ら教員を雇い、効果を上げていると聴く。特に、校長の教員管理について話を聞きたい。

以上のような視点を持って、具体的には、以下のような質問事項を準備し、バージニア・ウイリアムソン小学校訪問に備えた。

＜学習指導の関して＞

- 子どもの主体性を引き出す工夫について
- アメリカの学校の基礎学力のとらえ方について
- アメリカでは、年間何時間勉強しているのか。
- アメリカでは、日本の学校のような学習指導要領があるのか。
- アメリカでは、すべてのクラスにアシスタントティーチャーがついているのか。
- 遅れている子どもの指導も、アシスタントティーチャーの仕事なのか。

＜学校管理に関して＞

- 日本では、家庭の教育力が低下してきている。そのため、学校で基本的生活習慣なども教えている。アメリカでの家庭の役割は何か。
- 日本の学校では、勉強以外のことまで教えていて、大変忙しい。アメリカの学校は、基本的には、どの様な力をつけようとしているのか。
- アメリカの教師は、同じ学年を続けて担当するが、そのメリットは何か。
- 校長が雇い入れる教師の基準は何か。
- 校長として、教職員の活性化を図るためにどのよう

な手だてを講じているか。

＜本校とウイリアムソン小学校について＞

・お互いのメールを使って、手紙や絵の交換をしていきたい。

・ウイリアムソン小学校では、コンピューター教育は、どのようにされているのか。

事前準備より

ウイリアムソン小学校からは、昨年に本校の教諭が訪問した時、たくさんのプレゼントをいただいた。このこともあって、各学年には、子どもの作品の準備をしていただいた。創作カルタや短歌を書いた短冊や色紙、絵画などが集まった。この他に、昨年訪問した教諭からのプレゼント、学校長からのプレゼント、それに私からのプレゼントなどを用意した。具体的には、掛け軸、扇子、箸、羽織、習字道具、折り紙、和紙などの日本独特のもので、かさばらないものを準備した。

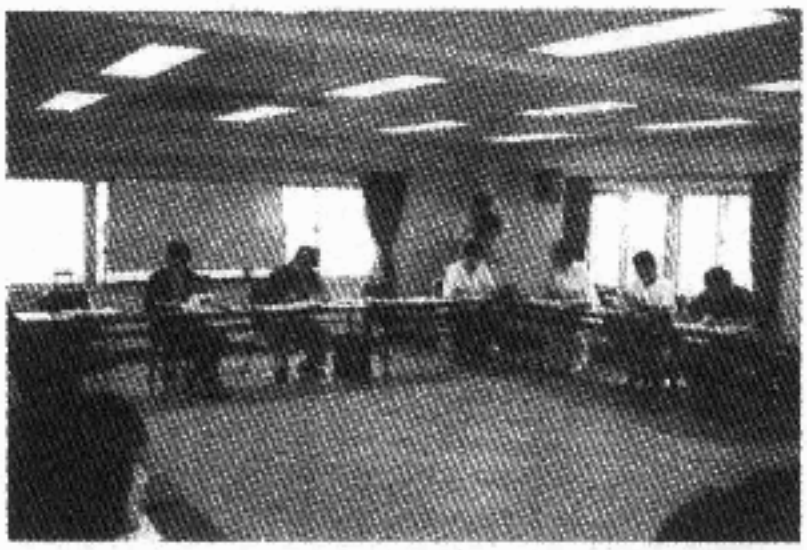
学校に帰ってからの報告用としてビデオカメラを持って行った。また、学校掲示用と、この報告書用にと考えてデジタルカメラも持って行った。それに、英語が苦手なため、英和・和英電子辞書も持って行った。

事前研修より（８月16日・17日）

広島大学、鳴門教育大学、大阪教育大学の各グループが初めて集まった。それぞれポリシーを持ってきている感じを受けた。英文で書かれたプロフィールのプリントが配られたのでどきっとした。アンサーは、日本語でよいということなので一応安心した。

アメリカやアメリカ人について大阪教育大学の教授より説明があった。

私の研修テーマでもある、アメリカ人は、自己主張するということとつながるが、アメリカ人は、自分の言いたいことを先に言うらしい。



アメリカ人は、人をよくほめる。それに比べ、日本人は、人をけなすことがある。日本人は、けなされて「何くそ」と思い成長してきたが、現在の日本人は変わり、けなされると、自信をなくすか、すぐ切れてしまう。

人権についても、日本人は、みんな同じことが平等と考えている。ところが、アメリカ人は、「異なって当然だ」と考えるところから始まり、相手の主張を尊重しながら自己主張する。まさに、アサーティブネスだ。また、国際理解教育を地でいっているようだ。

教育の問題では、アメリカは、1980年代後半から「危機に立つ国家」論を大統領自ら展開している。これは、上からの改革ではなく、下からの改革を説いている。

1996年には、教育改革プランとして、教育レベルをあげる取り組み計画（ＡＢＣプラン）が発表された。これをうけてノースカロライナ州のラレーのハント知事は「学力レベルを上げないとだめだ」という号令を出した。この取り組みにより、学力レベルが上がった。この計画によると、学力が伸びた学校には、予算が付く。しかし、学力レベルがひどい学校には、指導が入る。また、学校には、学力がなぜ低かったのかを説明する責任がある。レベルを上げるためのテストが毎週行われる。学校全体のレベルを上げるために、白人と黒人のギャップを埋める取り組みも行われている。小学校３年生以上高校を卒業するまでの基準を設けている。基準は、各学年の入り口の基準である。基準は、読み、書き等の基本が中心である。学力レベルを上げるために質の高い教師、校長、教頭を確保している。また、強いサポートを地域の企業などから得ている。

2002年のＡＢＣプランでは、レベル３以上までどのくらいの学校が達成しているか調べている。50%以下の学校には、ノースカロライナ州の指導が入る。トップ校には、1500$のボーナスがでる。学校毎に成績をつけて公表している。

アメリカでは、学校図書館（メディアセンター）の取り組みが進んでいる。図書館には、図書だけでなく、インターネットやＣＤを置き、調べ学習に活用され、週に１回、調べ学習の発表会がある。

学校には、ボランティアがたくさんいて学習に課題のある子どもを教えている。

障害児教育については、インクルージョンの考え方に立ち、原学級保障が行われている。また、障害者の組織を作り、農場を経営したり、家を造ったりしてい

る。教育に対する配慮が日本と大きく違う。

スポーツ活動について言えば、小学校は、コミュニティースポーツが盛んで、教育委員会や社会教育の主催で行われている。中学校では、クラブチームに属している子どもが多い。高校になると、スクールチームが盛んになる。

中学校や高校では、警官が常駐していて、ドラッグの授業を行う。

近くに海軍基地があり、軍の授業もあり、教師の中には、元軍人も多い。

人種で言うと、ノースカロライナ州は、全米に比べて黒人が多い。公立は、児童・生徒の3分の1が黒人である。ヒスパニックやアジア系は、少ない。

生徒指導のあり方が日本とだいぶ違う。例えば、アメリカでは、ある決まりを破ると、注意されたり、草取りなどの罰が与えられる。教師の役割分担が明確で、アシスタントティーチャーが、しかり役である。続けてしかられると、校長のところへ行かされてしかられる。校長は、しかり役なのである。

子ども達の放課後の生活は、日本とだいぶ違う。3時30分になったら、子どもは学校から一斉にいなくなる。塾は、ほとんどない。アメリカでは、12歳以下の子どもが、独りでいることは法律で禁止されている。そこで、ほとんど教会、民間のセンターで預かってくれる。

幼稚園から16才まで義務教育であり、幼稚園では、アルファベットも教えている。

次に、学校予算である。学校で自由に使える予算を持っていて、ローカルコントロールが強く、使い方は、学校に任されている。保護者からの寄附（一人あたり30$くらい）がある。(教育にお金をかけるのは当然という考え方かもしれない。) 寄附のできない保護者は、学校でボランティア（アメリカでは、ボランティアというよりも、公共の仕事をすることは当たり前らしい）を行っている。学校で作成したTシャツを売って学校の収入にしている。また、企業からコンピューターを寄附していただき活用している。(どうりでコンピューターが多いはず。) 図書館の本も日本では、古くなると廃棄にするが、アメリカでは、子どもに売っているようだ。

いよいよ学校訪問開始!

8月19日（月） 中学校・小学校・高校を訪問

〔中学校〕

900人の規模の学校で、教師が60人いる。各教室に二人の教師が配置されている。数学・技術・科学が中心である。

パームパイロットスクールで小型コンピュータがクラスに5台ずつあった。しかも、教師がコンピューターを使いこなしているのには驚いた。本校の教師も使いこなしてはいるがレベルが違いすぎた。しかも、4つのコンピュータールームを持っていた。また、学校全体をコンピュータにより、処理できるように構造化している。

あるクラスでは、「リバープロジェクト」と称して、水質汚染の学習に取り組んでいた。日本でいう総合的な学習のような感じもしたが、理科の卒業論文の方が当てはまる学習である。

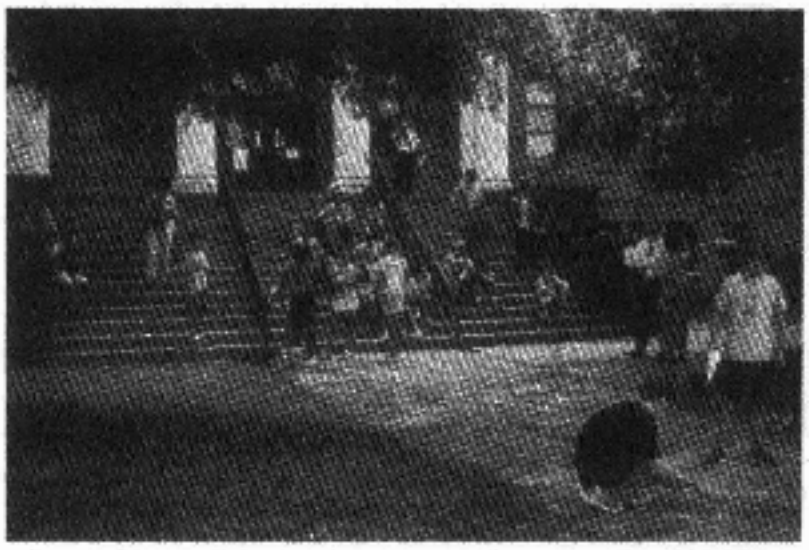
人種の比率は、白人が55%、黒人が42%、ヒスパニックが3%である。他の学校に比べて、黒人の比率が高く感じた。

予算は、ノースカロライナ州から7万5千$、国から同じく7万5千$もらい、合わせて15万$である。

ハリケーンについて学習しているクラスを参観した。4つの机が空いているので聴いてみると、抽出しているとのことである。その理由は、外国人なので言葉の面で助けが必要だからだ、ということであった。抽出については、日本では論議を呼んできたところであるが、アメリカでは、当たり前の学習スタイルである。

社会見学（宿泊を含む）は、6年生では、ワシントンへ旅行に行き、200$かかる。また、他の学年では、ホルコースとミュージアム(ドイツ)を観に行っている。

次に、7年生のクラス(26人)を参観した。リーディングの授業である。このクラスは、いろんな国から来米している子どももたくさんいるので、それらの国の文化の違いについて学んでいた。例えば、マナーや食べ物の違いなどである。掲示物に目をやると、新学期が始まって2週間ということもあり、自己紹介文が掲示してあった。まさに、多民族クラスならではの取り組みであると感じた。リーディングの教材として、「世界の国の文化」を取り上げ、自然な形で人権教育を行っているところにアメリカの度量の広さを感じた。日本でも、対象の子どもを意識した取り組みを行ってきた



が、焦点をはっきりしすぎたきらいがある。大変参考になった取り組みであった。

校庭では、数学と科学を一緒にした授業が行われていた。紙飛行機を飛ばして、飛んだ距離を競い合わせていた。統計学と揚力の学習である。日本でいう総合的な学習を一般教科に取り入れた学習である。クロスカリキュラムを立てた上での取り組みであろう。日本では、完全学校週五日制の実施や新学習指導要領の導入により、年間総授業時数が大幅に削減された。また、自主的主体的な学習や体験や問題解決学習が全ての学校で取り組まれている。このようなことを踏まえ、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むために、各学校は、「合科」を意識した年間カリキュラムを作成し、指導方法を研究する時期にきているのではないでしょうか。

次に、6年生のクラス(29人)がコンピュータールームでニューズレターを作っている授業を参観した。日本でも、同じような授業があるが、調べ学習で多くの時間を費やしてしまう。この点、教材の準備として事前に、子どもの発想を想定したプログラムがコンピューター内に組み込まれていた。授業時間の短縮につながるが、教師の教材研究の時間が気になってくる。教材研究は、何時しているのかと尋ねてみた。すると「みんなが、いている学校ではできないので、休みの日に、家で教材研究している」という返事が返ってきた。日本の教師も、完全学校週五日制になり、土曜日に家で教材研究をしているようだ。ただし、日本の教師の場合、その週の子どもの提出物の丸付けや添削も家で行っている。

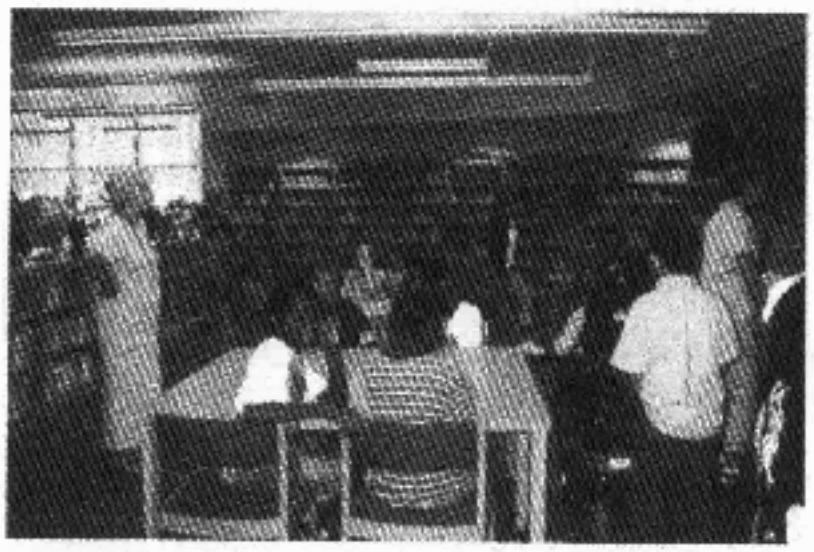
次に、ランゲェージ・アート(国語と美術が一緒になっているような授業)を参観した。日本でいう絵本のような感じで、自分史をかかせていた。ここも、人種問題を取り上げた授業であった。続きは、宿題になった。訪問したウイルミントン市は、南北戦争で最後の戦いが行われたところでもあるので、大変重要な授業であると感じた。

先ほどの、リーディングの授業でも、人権問題を扱っていたし、自分史の授業も人権問題だった。学年会議で、リーダーの教師により重点課題が決められる。例えば、リーダーが、「人権」というテーマを設定すると、リーディングの教師は、「外国の文化」と課題を定め、ランゲェージ・アートの教師は、「人種」と課題を定めるといるという具合である。日本の中学校では、例えば、社会科の中で、「在日朝鮮人問題」、「部落問題」、「障害者問題」などの中から生徒が自ら課題を選択し、研究していく授業に取り組まれてきた。現在では、総合的な学習や道徳の中で取り組まれていくことを期待している。

〔グレゴリー・エレメンタリー・スクール〕

ノースカロライナ州での学力評価が二位の小学校である。玄関の受付には、誇らしげにこの賞状が飾ってあった。日本の学校では、校長室に飾ってあるのはよく見かける。私たちのような訪問者に説明するには、うってつけの場所である。しかし、子どもには、目につきにくい。子どもにも誇りに思ってもらうために、玄関に陳列ケースを設けて展示してはどうか。アメリカでは、毎日、保護者が子どもを送り迎えしているので、なおさら誇りに思ってもらう絶好の場所でもある。

この小学校の紹介をしてみる。全校児童数は、565人の学校である。学区がなく、言語教育を中心に学習が行われているので、それに賛同する保護者や子どもが、ここの学校を希望して通学してきている。しかも、公立の学校である。予算は、ノースカロライナ州で学力レベル二位の学校であるので、ふつうの公立小学校の予算プラスαを獲得している。1クラスに5台のコンピューターがあり、アップルコンピューターでIマックスからEマックスに切り替えてきている。



〔スクールカウンセラーによる授業〕

図書室で学校紹介を受けた。そのかたわらでは、スクールカウンセラーによる授業（3年生～4年生）が行われていた。スクールカウンセラーの仕事は、子どもの生活教育やスタディースキル、自己表現力をつけさせることである。

指導のためのプログラムを持っている。今回は、「友達とけんかがあって、どうやって修めていくか」ということがテーマだった。日本でいう道徳教育とよく似ていた。この他にも、テレビに生活上のものを流して、考えさせる学習も行われるそうだ。スクールカウンセラーは、週に2回来て指導しているということだった。スクールカウンセラーが週に2回来て、しかも専門家であるので効果が上がることは間違いないと思った。本市の学校でも、中学校が中心になるがスクールカウンセラーが相談室に来て、子どもや教師の相談に乗っている。日本では、いじめ、不登校、新しい荒れ、学級崩壊等の問題が依然として発生し、学校においては、心の教育の重要性が大きな課題である。このようなことを踏まえて、法改正をしても、スクールカウンセラーによる授業が行われるようになれば結構なことである。道徳の教科書は無いようであるが、教師用の指導書は、一般の会社が創ったものがある。このようなことからも、アメリカでは、国をあげて教育に力を入れていることが見えてくる。道徳教育は、子ども達が就職したときに役に立つと考えると、企業が道徳教育の指導書を創る意義もわかる。道徳教育は、以前は、幼稚園で教えていた。構成は、今も何も変わっていないらしい。しかし、内容は、学年によって、プログラミングされている。クラスにより子どもの実態が違うので、クラス毎の目標があり、「学力レベルが二位であるということは、年間プログラムが確立されているということである。日本では、道徳の目標は、学年毎に年間目標として立てられる。アメリカのように、日本もクラスにより子どもの実態がちがうので、クラス目標やクラス毎の年間計画があってもよいのではないかと感じた。

〔理科室〕

次に、理科室に行ってみた。理科の専科の教師がいるところまでは、日本と同じであるが、そこには、小動物が飼育されていた。これらの小動物は、寄贈されたもので、幼稚園から5年生までの子どもが来て飼育しているということである。週末は、餌をたくさん与えておくそうである。夏休みなどは、寄附した人が持って帰って世話をするそうである。また、たくさんの子どもが観察しやすいように、実物投影機やマイクロスコープなどの機器もふんだんにあった。小学校で理科専科があり、実物教育のいいシステムがあるのは、ここだけだそうだ。理科専科といっても、理科のプロに近い専科であった。これからは、算数についても、専科を導入していくそうだ。

CONSEQENCES

1. Warning
2. Time-out
3. Teacher slip
4. Call parent
5. Office ••••

ノースカロライナ州で学力レベルが二位の学校であるので、学校に勢いがあるのはわかる。それに、プラスαの予算も大きい。これにより、理科専科の教師を獲得したのではないだろうか。これがなければ、算数にも広げていくと公言できないであろう。

〔その他〕

「学力レベルが二位であるということは、レベルの高い子どもが多いのではないか。今までの日本の学校では、クラスの中にレベルの高い子どももいれば、課題のある子どももいる。これが普通のクラスの現状である。」というような質問をしてみた。すると、「もしも、程度の高い子どもがいると、中学校へ行く。人数が多いとくじを引いて中学校へ行くことであった。小学校で落第はあると聞いていたが、飛び級があるとは驚いた。このようなことがあっても、周りの子どもは、ねたみや偏見を持たないらしい。このことは、自己主張ができるアメリカ人らしいところで、一人ひとりが独立しているというか、個性を大事にしている国らしいところである。

素行が悪い子どもは、排除される。教室には、5つのランク表が貼ってあった。

ランクを書いたプリントを家に持って帰らせるそうだが、日本の学校では、きっとこのようなプリントは、なかなか家に届かないのが現状である。その場合どうするのか、聴いてみた。すると、保護者は、毎日迎えに来るので、その時に保護者の方から「今日は、どの

ランクだった。」という声かけがあるそうである。だから、間違いなく、保護者の耳にはいるらしい。移動するのに廊下を並んで歩いたり、遅刻がなかったりする意味が少しずつわかってきた。子ども達は、管理されているといえば、ある一面では管理されているといえる。民主主義の国アメリカの違う一面を観たような気がする。

ＬＤに近い子どももいる。また、黒人の子どもも数％とることになっているらしい。

ガーデンは、ＰＴＡが手入れしている。ＰＴＡが手入れしているというような札がかかってあった。ボランティアというよりも当然の行動らしい。

幼稚園から２年生までは、アシスタントティーチャーが入っている。このアシスタントティーチャーは、日本でいうＴＴではなく、生活指導中心の教師らしい。従って、主になる教師は、授業に集中できることになる。日本では、考えられないシステムである。アメリカでこそ役に立つシステムであるといえる。

アメリカに、日本のような学習指導要領のようなものがあるか聴いてみるとノースカロライナ州には、あるらしい。全米でカリキュラムを創るという動きがあるということがわかってきた。例えば、数学教育研究会のような組織があって、ノースカロライナ州では、大変な力を持っているらしい。そこが行うテストがあって、どれくらいできているか調べられる。

学校までの送迎は、スクールバスでも行われる。このバスの中で他の人に危険を及ぼすような悪いことをすると、出席停止になる、あるいは５日間バスに乗れないことになる。出席停止の間学習保障はどうなるのか、訪ねてみた。すると、「宿題を出し、それをチェックする。」または、「教育委員会がその子どもに教えに行く。」という返事が返ってきた。出席停止は、厳しすぎると思うが、校則には、徹底したものがあり、本人もこの校則があることも知った上で入学してきているので、仕方がないことかもしれない。

体罰は、禁止されている。子どもも選んで入学してきているので、考え方が違った場合は、話し合いも起こる。これが、アシスタントティーチャーやスクールカウンセラーの役目になるが、時には、教頭もこの役目を担う。

幼稚園から５年生まで１時間から１時間30分かかる宿題が毎日出る。サマーホームワークは、調べ学習もあるが、したかどうかのチェックはしていない。進級テストでわかっているか、すぐわかる。学力レベルにこだわっている学校にしては、少しルーズな気もするが、進級テストで落第もあるので、あえて調べなくてもきちんとしてきていると思える。しかし、やり遂げたのと理解しているのとは、大きな違いがある。日本の教師であれば、理解しているかというところに視点を置き、チェックするだろう。もっとも、日本の場合、落第はない。アメリカの場合、進級テストで子どもの成績が悪いと、子どもは落第になると同時に、教師の評価にも影響し、免職となることもある。厳しい社会である。

この小学校では、リーダーシップグループというのをつくっている。成績等の優れたものが代表になる。選ばれた子どもは、名誉に思うらしい。上の子どもが、下の子どもを教えたりする。けんかの仲裁は、優秀な子どもと重なる場合が多い。

８月20日（火）

バージニア・ウイリアムソン小学校訪問

ホテルから車で30分くらいかかり、ようやく目的地のバージニア・ウイリアムソン小学校に到着した。牧場の中にある学校と言う感じだった。何しろ、日本の学校とは違い、垣根がないことに驚いた。初めにお会いしたのは、女性の日本でいう校務員さん（２名）である。私たち訪問者が、挨拶をすると気軽に笑顔で挨拶を返して戴いた。２人でベンチにペンキを塗っておられた。日本では、１～２名の校務員さんの数であるが、ウイリアムソン小学校は、ペンキなどの仕事の方が２名、ガーデニングの方が２名、内装関係の方が２名で合計６名もおられた。それに、保護者のボランティアもいると聞いている。これだけの環境整備をしてくださる方がいると、学校は綺麗になると思い、うらやましかった。

玄関に入り、校長先生や教頭先生、事務の方のお出迎えを受けた。他のアメリカの学校もそうであったが、玄関にはベンチが置いてあった。登校時に、保護者や子どもからゆっくり落ち着いて話を聞くためのベンチであると感じた。

初めにメディアルームを見せていただいた。貸し出し用のコンピューターが整理されていた。普通教室でも使えるようになっているらしい。いったい何台のコ

ンピューターを保有しているのかと驚いた。しかし、図書の本は、日本より少なく感じた。この時、日本の子ども達の活字離れが、脳裏をかすめた。実際の図書の時間の授業を観たことはないが、メディア化が進みすぎて、読書をする習慣が少なくなってきているのではないかと考えてしまった。「日本紹介コーナー」があった。絵本を見ると昔の東南アジアの文化が入り交じっていて、日米交流の大切さを痛感させられた。

日本の学校の校長は、教師にいちいち細かいところまで指示や指導はしないが、ウイリアムソン小学校の校長は、「１週間の課題」をそれぞれの教師の棚の中に入れておくそうだ。もっとも、課題だけではなく、その教師の誕生日プレゼントやお祝いのメッセージ等も入れておくそうだ。その教師が賞を受賞した時とか、みんなでパーティーを開くことなども考え、細かい配慮も行っているところに感心した。

スクールバスの見学をした。アシスタントティーチャーが、運転すると聞いて驚いた。日本の普通学校には、バスはないが、養護学校の送迎用のバスは、プロの運転手が配属され運転している。アメリカの道路は、そんなに危険なところはないので、私は、納得もしている。児童数は、560名の学校である。バスは、8台ある。これだけバスがあれば、社会見学や遠足なども気軽に行けると感じた。また、配慮もされていて、車椅子で乗れるバスもあった。

次に廊下を通って、ランチルームまで案内していただいた。廊下には、「日本コーナー」があり、昨年、ウイリアムソン小学校の副校長が本校を訪問された時にプレゼントした子どもの作品が展示されていた。こんなに大事にされているのを観て、大感激した。ランチルームは、220席あり、時間差を設けて食事をするらしい。お弁当を持ってきている子どもがいたり、２$のお金を持ってきている子どもがいたりいろいろである。全てバイキング方式である。これをすると、好きな物が食べられて、残飯も少ないだろうと思われたが、教師も子どもも惜しげもなく捨てているのを観て、心が痛んだ。しかも、分別もしていなかった。ランチルームに子どもを連れてきて、一緒に食事をするのは、アシスタントティーチャーの仕事である。

午後から、図書館司書による４年生39名の授業を参観した。日本のことで知っていることを出し合っていた。ハンディのある子どもには１対１の付き方だった。図書の販売斡旋も行い、保護者にカタログを見せて販売していた。

教室により自動ロックのところもあった。遅刻厳禁である。教室を移動するのに、廊下を並んで歩いていた。お互いに「シー」と声を掛け合っていた。トイレの前でも廊下に並んでいた。これは、アメリカの学校では、普通らしい。

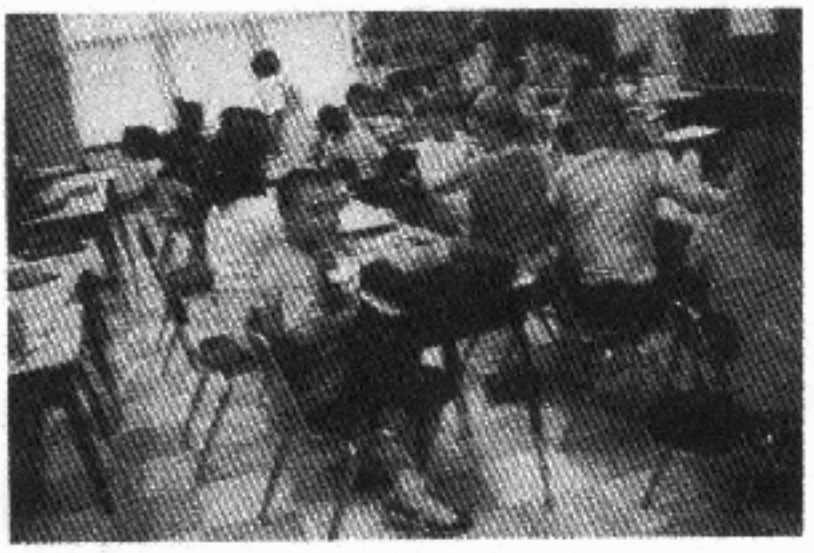
8月21日（水）

ウイリアムソン小学校訪問（２日目）

３年生がテストをしていた。ノースカロライナ州全体のテストだ。机も交互に並べてあり、掲示物も一切ない部屋で行われていた。廊下でノースカロライナ州のテスト監視員にあった。不正が行われていないか、監視に来たと言うことだった。テスト結果は、公表されることもあり、厳しく観ているようだ。

どこのアメリカの学校でも行われているのが、学期末テストである。個々人の伸びを調べるのと同時に、落第も決まる。この他に、中間テストがある。このテストは、子どもの弱点を見つけるテストで、教師にとってもプレッシャーがかかる。３年生は、３日間連続でテストをしていた。テスト中心に教育がいってしまいがちになるところが問題だと考えさせられた。到達度に達すれば、主要教科以外（例えば、ダンス等）のこともできる。

自己表現力の育成について聴いてみた。これは、幼稚園から始めているようで、幼稚園では、一番好きなおもちゃを持ってこさせたりして、その説明をさせている。小学校では、「自分は何を知っているのか」を人の前で言わせている。また、日直には、その日の連絡を朝の会でさせている。全体に教師から「みんなに話したい人はいませんか」と聞いたりしている。また、５分間スピーチも行っている。このような取り組みを

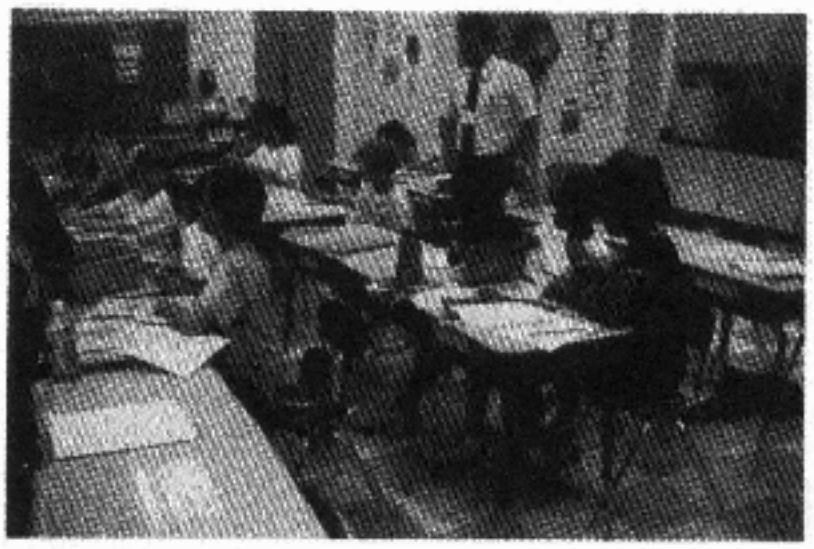


通して子どもは、「先生は、自分を大切にしてくれている」と思うらしい。日本でも全く同じような取り組みを以前から行ってきている。同じ取り組みを行っても、日本では、自尊感情や自己表現力が育ちにくいのはなぜだろうか。日本では、家庭でつけるべき基本的生活習慣などを初めとして、家庭や社会がつけるべきことまでも、学校が引き受けてきてしまった。その上、一部の教師の不祥事やいじめ、不登校、新しい荒れ、学級崩壊などが発生し、学校全体としての信頼と自信が揺らいできている。完全学校週五日制のスタートや新学習指導要領の実施をうまく活用し、学校の信頼回復に全力で取り組むことが、学校教職員の最大の命題である。

次に、5年生（21名）の分数の授業を参観した。小数を分数に直す方法を学ぶ授業である。何人かの子どもに前に出て説明させ、その後、できる子どもは、できない子どもに教えていた。白板を使っての授業であった。分数や小数については、日本の方が、優れた教具がたくさん工夫されており、進んでいると感じた。

6年生（17人）のリーディングの授業を参観した。日本でいう理科と社会の合科である。世界地図（日本は左の端）を見て地形の学習後、「夢のアイランドを見つけに行こう」というテーマで、子ども一人ひとりが、探検家になって理想の島を発見しに行くという想定である。今までのまとめのような授業であったが、理科と社会の内容をふんだんに取り入れた質の高い授業であった。しかも、子どもの発想をうまく授業に取り入れていた。日本でも総合的な学習だけでなく、一般教科の中にも学び方や生き方を学習する指導法をもっと取り入れるべきだと痛感した。

ウイリアムソン小学校には、英語が話せなくて、スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語などの外国語を話す子どももいる。スペイン語で英語を教える授業を参観した。この教師は、週に2回ウイリアムソン小学校に教えに来ている。A～Zの頭文字から言葉を考える学習だった。英語ができなければ、進級は難しいと考えたが、テストに合格さえすれば進級できるらしい。日本では、帰国子女等の日本語教室があるが、このように1対1で教えるシステムがないのが残念である。



8月22日（木）

ウイリアムソン小学校訪問3日目

4年生（17名）の算数の授業を参観した。「594セントを一番少ないお金で払う方法」を考える問題である。できるだけ早く考えるようにしている。お金の他に日付、時間などの問題をする。復習することにより理解させている。計算は、暗算で行う訓練をしている。理解不足の子どもには、授業を止めて教えているが、復習なので止まることはない。子どもは、朝、白板に書いてある問題をすることになっている。

4年生のリーディングの授業を参観した。子どものアイデアで、読む時間を計っていた。ディスカッションリーダーがいて、質問用紙を持って質問していた。グループに分かれての学習である。この、読解力をつけるための方法は、夏休みに「読解力をつけるプログラム」を学んできた先生から、学んだ方法だそうだ。幼稚園から3年生までは、別のプログラムを使い、4年生と5年生は、新プログラムで授業を行っているそうだ。低学年は、自分のことを学び、4年生は、ノースカロライナ州のことを学び、5年生は、他文化を学ぶ。

4年生（15名）リーディングの授業を参観した。ノースカロライナ州についての内容で、スペリング、作文の学習であった。高学年は、ノースカロライナ州が作成した本を使用している。日本のように教科書は、無償配布ではなく、一人ひとりに貸してくれる。5年毎に更新する。郡毎に採用する。州の教科書であるので、1年間の教えるテーマが決まっている。

2年生（20名）の図工を参観した。内容はともかく、子ども達は、並ぶことと整頓、それにおしゃべり厳禁を厳しく指導されていた。子どもへの「注意」が、5段階（緑、黄、赤、青、紫）に分かれていて、紫になると保護者に報告される。同じグループの子どもが、教師に告げ口に行くと、グループの子どもは、緊張していた。このカードは、毎日持って帰るらしい。この

方法は、郡全体でしている。

学年全体のテーマが、チーフの教師により決められる。それに従って、主要教科のテーマが決められていく。美術は、主要教科でないので、テーマを決める論議に入れない。

＜校長との面談より＞

【ノースカロライナ州における教員採用までのシステム】

大学3年生になる時に、どの校種の教師になりたいのか決める。卒業1年前に州のテストがあり、合格すれば半年のインターン（教育実習）の一時的免許がもらえる。これは、4年間有効である。この免許は、毎月更新しなければならない。ちなみに、永久免許は、5年毎に更新である。1年間に4回の郡で一番いい指導教官がつく。

採用の申し込みがあれば、校長は、本人を学校に呼ぶ。

①申込書のチェック（管理職）

②インタビュー（教師も入る）

③面接決定を本人に伝える。

④校長が本人を迎えに行く。

⑤他教師に説明し、紹介する。

⑥みんなで相談する。

⑦最後に校長が決定する。

⑧推薦状を教育長に提出する。

面接には、保護者も入る学校もある。

ノースカロライナ州の免許があれば他の州にも行ける。

30年間仕事をすれば、リタイアとなる。

研修結果と考察

ここで、ウイルミントン地区での私の3つの研修テーマに基づいてまとめる。

1．アメリカの自己主張できる子ども達

前文でも示したように、アメリカの子ども達は、幼稚園から自己主張する場が設けられている。この場の設定も、きっとすばらしいだろうと推察することができる。幼稚園では、自分の好きなおもちゃを持ってきて説明や発表をさせるのであるが、きっとこの時、発表者に注目させる何らかの方法をとっているに違いない。例えば、台の上に乗せたりしていると考察できる。小学校では、自分が自慢できることなどをみんなに話をさせるのである。この時も、きっと、ウイリアムソン小学校にあったミニ発表会場をフルに活用しているに違いない。このように、小さい時から自己発表すること、自己主張することにより、みんなに認められる、みんなから大事にされているという自尊感情や自己効力感が芽生えてきているのではないだろうか。

一方、集団意識や帰属意識に目をやってみよう。アメリカは、通学範囲が広いため、隣近所という意識は、もってないだろう。学校でも、みんなで遊んだりする時間もないので、集団意識ないと思われる。けんかもすぐ止められるので、仲間づくりの切磋琢磨もない。ようは、集団をあまり意識していないのではないかと思われる。それと仲間意識と自己主張とは、別物のように思われる。それは、アメリカンフットボールを観戦に行った時、アメリカ人同士は、知った人を見るとすぐに握手をし、何か言葉を交わしている。これは、きっと、「あなたと私は知り合いなのだ」という一種の縄張りではないだろうか。

小学校での自己主張スキルが、中学校でのプロジェクト学習や高校でのシニア・プロジェクトにつながり、自ら課題を見つけ、探求し、論理的に表現する力につながってきていると思われる。

これに比べ、日本の子ども達は、なかなか自己主張ができない。日本の教育は、個性よりも均一性を重視してきた傾向がある。現在、日本は、国をあげて教育改革に取り組みだしたところである。教育改革国民会議や中教審等の答申を受け、学習指導要領が改正され、総合的な学習を目玉として、自ら課題を見つけ、自ら考え、判断していく学習や個性を生かす教育に取り組みだしているところである。学校と家庭、地域が一体となり取り組んでいくことにより、自己主張できる子ども達に育っていくことと確信している。

2．アメリカの人権教育

アメリカは、多民族国家なので、教育と人権問題は切り離せない問題だろうと考えてきた。日本では、いじめや学級崩壊が、人権問題へと広がってきたこともある。

アメリカは、スクールカウンセラーや臨床心理士が、道徳の時間にトラブルを解決するスキルを幼稚園の頃から教えてきている。また、人権を学習テーマにあげ系統的に取り組んでいく組織が確立されている。例えば、国語で自分史を書かせてきて、発表させたり、社会科では、アメリカ国内の文化を調べて発表したり、

美術では、「人種」というテーマで絵本にしてまとめたりしている。アメリカは、個人の独立性の強い国なので、あまり人権ということは、問題にならないのかもしれない。子ども達を見ていても、別室で学習していたり、学習の途中でクラスメートが戻ってきてもあまり気にならないらしい。4日間の学校観察であったこともあり、人権問題については考察でききれなかった。

3．アメリカの効果のある学校づくり

教育効果を上げるには、教職員が同じ方向を向いて進んでいかなければならない。そのためには、学校の活性化は、必要不可欠である。そこでウイリアムソン小学校の校長に学校の活性化についてインタビューしたら、次のような答が返ってきた。

【学校の活性化について】

教師は、5年間のうちに100時間・10単位分の勉強をしなければならない。そのうち、20時間・2単位はテクノロジーである。

①このように他で学んできたことは、校内研修会を開き、他の教師にも成果を広めていく。

②困っている時に助け合えるような規則を一緒につくる。

③いい成績を修めたら、賞を与える。

④校長が教師の例になれるよう行動する。

日本では、5年研修や15年研修は、教特法により、義務づけられている。最近、10年研修も義務づけられた。アメリカでは、1年間に直すと20時間の研修ということになる。日本の教師は、民間の研修も含めて20時間も研修しているだろうか。

①の内容については、すばらしいことだと思うが、業務を見てみるとその時間がなかなか確保できにくいのが現状だ。思い切って、削っていく業務を考えていくべきだろう。そして、研修内容を共有できる時間を確保していきたい。

②については、アメリカの場合、教師の年齢のバランスがとれている。日本の場合、特に30歳代が大変少ない状態だ。しかも、50歳前後の教師が多い。そのせいか、お互いにわかっているものと思って、あまり論議しなくなっているのではないだろうか。この点、アメリカの学年会が印象的だった。それは、分数指導の教材研究で、若い教師が、指導方法で悩んでいることを持ち出すと、経験が豊富な教師は、過去の実践で成功した例を挙げて説明していた。結局、成功した例の方法で分数指導を進めていくことになった。日本では、このような話し合いが少なくなってきている。日本には、眠っているすばらしい実践事例がたくさんある。これらを学ぶことこそ、即戦力になる研修である。

③については日本の教師の苦手なところである。これは、必ず教師の活性化につながることなので、まず、管理職から率先垂範していかねばなことだと痛感した。

続いて、効果のある学校について聴いてみた。すると、次のような返事が返ってきた。

【効果のある学校について】

①校長の独断ではなく、教師の意見をよく聴くこと。
　押しつけでは、教師や学校は動かない。

②管理職との信頼関係により、教えていて心地よいと教師が思う学校。

③各教師に仕事のできばえを認めるような声かけやお祝い、パーティーを行う。小さいことから認めていくことが大切。

①については、特に大阪の中でも高槻においては、ボトムアップの学校づくりが以前から進められてきている。これにより、教育改革が急速に進んできている。

②についても、日本では、学校の特色づくりや開かれた学校づくりに管理職だけではなく、保護者や地域も巻き込んで取り組んできた学校は、教師の信頼が高くなってきている。この結果、心地よい気分で子どもとともに、学んでいる教師も増えてきている。

③については、ほめられれば誰しもうれしいものである。アメリカ人は、本当に上手に人をほめる。見習いたいものである。

特に、アメリカの自己主張育成教育や効果のある学校づくりについては、学ぶところがたくさんあった。焦らず、学校あげて取り組んでいきたい。

今後に向けて

アメリカ大陸の広さに圧倒されると同時に、アメリカ人の心のスケールの大きさや人をもてなす心意気には感激させられた。前述したように、教師がアメリカの学校を中心に訪問をして、参考になることがたくさんあったのだから、子どもどうし交流するともっと得るところが大きいと思うと同時に、確かな国際理解教育になる。本校とウイリアムソン小学校との姉妹校交流も、そろそろ子どもどうしの交流を行っていきたい。ウイリアムソン小学校の5年生から本校の子ども達へ

のメッセージを言付かってきた。早速、本校の子ども達は、返事を書き、航空便で送ったところである。ウイリアムソン小学校の子ども達からのメッセージからは、ウイルミントン地区の子ども達の生活が伝わってくる内容であった。返信で本校の子ども達の生活ぶりもわかってもらえる。このような通信を続けていきたい。また、「モジコ」という機器をいただけると聞いている。この機器は、子どもの手書きの文字のままで、しかも、日本語を英語に翻訳してくれる優れものである。絵や写真も送れると聞く。この機器もフルに活用し、交流を深めていきたい。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
研修概要（2002年8月16日－8月28日）

東大阪市立荒川小学校　教諭　**高　井　延　子**

8月16日（金）

新大阪コロナホテルにて、事前研修会がもたれる。広島地区、鳴門地区、大阪地区、各地区の参加者の自己紹介と研修目的の紹介の後、米川教授よりこのプロジェクトのおおまかな流れ、そしてノースカロライナ州の教育事情を中心に話が進められる。

8月17日（土）

デトロイト経由でローリーに到着後、車でウイルミントンに移動をする。途中、ハンバーガーショップで夕食をとる。飲み物やサラダの量の多さに驚く。立ち寄ったスーパーは、夜遅くまで営業をしているようである。

8月18日（日）

宿泊しているホテルにドクター・ウォーカーが車で迎えに来てくださり、午後からは街の視察となる。ホテル近くには、現在博物館である軍艦ノースキャロライナが停泊している。この辺りでは、映画の撮影なども行われる。

ショッピングセンターの中の書店では、日本の「ピカチュウ」の絵本が売られていたり、「遊戯王のカード」がレジ近くに並べられていた。やはり日本のアニメは人気があるのであろうか。

その後ビーチに案内してもらう。長い白い砂浜には、日光浴や水泳、サーフィンを楽しむ人々がいたが、日本で見られるような騒がしさや人混みは全く見られない。のんびりゆったりとした雰囲気が漂う。

ビーチを後にして、ノースカロライナ大学のキャンパスで、体育館、プールなどを見学させていただく。大学の敷地は広く、校内の移動はやはり自転車なのだろうと想像がつく。ここノースカロライナでは松が最も一般的な木だそうである。松ぼっくりは大きく、松かさが開くとパインナップル状になる。

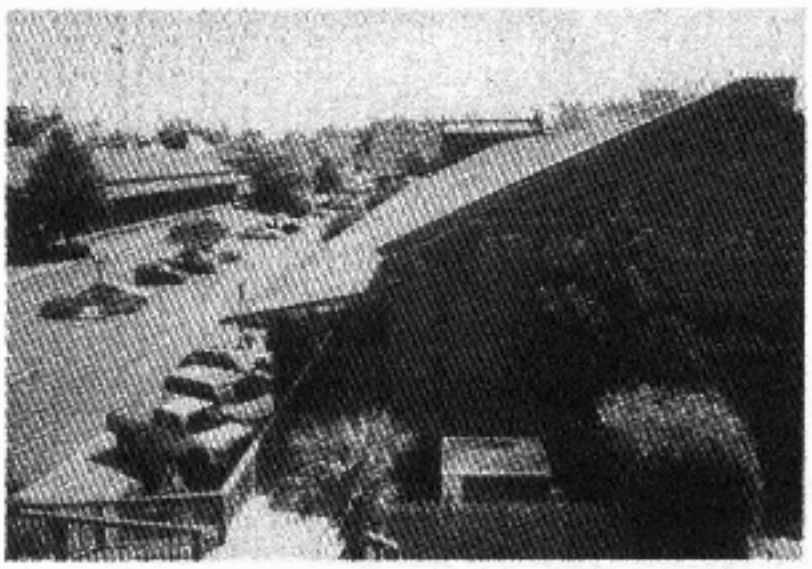
その後に訪れた公園の池には、本物のワニ（アリゲーター）がいた。めずらしいのか、人が集まっていた。公園内にはスケートボード場があり、1日5ドルでスケートボードを終日楽しむことができる。ビーチよりもこの公園では、アフリカンアメリカンが多いように感じられた。理由を尋ねると、もともと居住区に「白人地区」「黒人地区」があって、そのなごりが残っているという話であった。

8月19日（月）

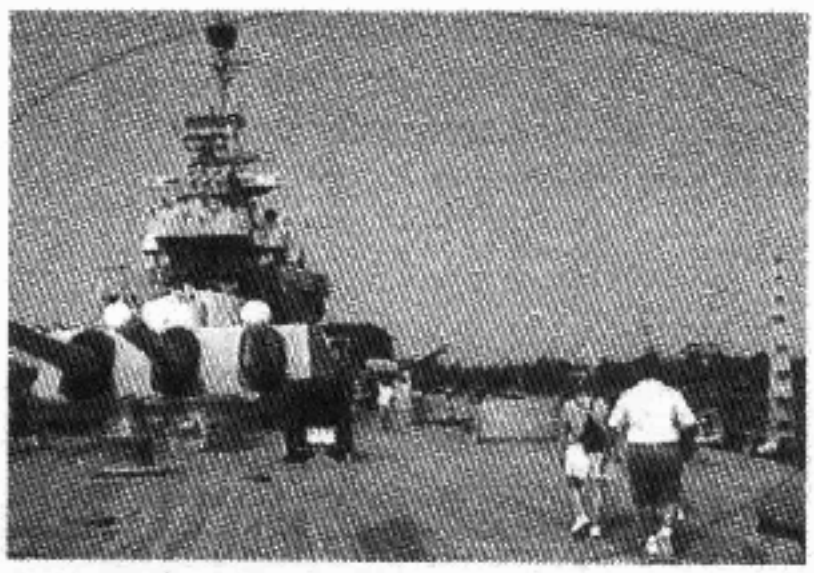
全員で、中学校、小学校、そして高等学校をまわって見学させていただく。

＜ウイルソン中学校＞

生徒数が約900人、先生が60人という学校で、理数系に力を入れているという話であった。パーム・パイロットというプログラムがあり、連邦政府のお金が出ていて、生徒は手のひらに入るような小さなパソコンを持ち、教師はそれで生徒を把握もできるし、生徒と先生



ホテル前の景色



ノースキャロライナ号

とが交信できるような仕組みにもなるようである。6年生、7年生、8年生の国語、数学、科学などの授業を駆け足でみせていただく。

＜グレゴリー小学校＞

学区のないマグネットスクールであるという話であった。生徒数は565人で、編入学については問題行動のある子どもについては入学を認めていないとのこと、また編入にあたっての人種については、人種別の構成割合をキープしているとのことである。国語を中心としたカリキュラムで、公立の予算プラス特別の予算がついて、最新型のE-Macが各クラスに5台ずつあった。Kクラスから2年までは担任の教師とアシスタント教師が一人ずつつき、3年生以上には各クラスにはつかないが学年で何人かのアシスタント教師がついている。この点は、日本と比べてきめの細かい指導がなされていると感じた。ナショナルカリキュラムがないため、全米数学教育研究会などの学会の基準をノースカロライナ州では採用しているということである。

道徳教育に関しては、スクールカウンセラーがいて週ごとに標語を教える。キャラクターエデュケーションというプログラムもあるようだ。

理科室では、ウサギやカメレオンなどたくさんの動物が飼われていた。日本では、大型の動物は校庭で飼うが、ここではエアコンの設備も整い匂いもほとんど気にならなかった。しかし日本の小学校の理科室で当然見られる、理科の実験器具はみあたらなかった。安全面での保障ができないという理由から、小学校では子どもたちには器具を扱わせないようである。

体罰はないが、学校の規律は厳しく5段階で示されている。たとえば、特別教科の図工の時間に態度が悪いと専科の先生からその担任の先生に

"～ had the following problem in art today ～."

と書かれた紙が渡される。最終的には、1日から2日の停学処分ということもあるらしい。特にバスの中でのマナーについての規律は厳しく、バスに1週間乗れないということもあるという話であった。もちろん停学、休学している子どもについては、ケアもなされていて教育委員会からコンタクトがある。規則という点では、子どもは廊下を1列に並んで歩き、トイレの前ではみなが終えるまで外で1列で待っている。日本ではこういった光景は、新入学の初日の説明の時にのみ見られる。このような管理の徹底には、安全性の重視が根底にあるように思えた。

宿題については、子どもたちは毎日1時間から1時間半程度の宿題を与えられる。夏休みの宿題は、調べ学習などが与えられるが特に担任がチェックをするわけではないらしい。ホームルーム的なことはなく、放課後のクラブ活動というものもない。ただ親の補助により新聞を作ったりしているようである。

＜アシュレー高校＞

1600人の学校である。ホガード高校から分離した学校で校舎はとても新しい。学校内に入ると、大学にいるような錯覚を覚える。服装などはピアス、ビーチサンダル、スリッパと自由で、授業中もガムをかんだり、水をのんだりと自由であるが、騒いで授業を妨害するような生徒は一人もいない。

世界史、科学、家庭科、物理の授業を参観する。特に物理のクラスは、レベルが高いそうでベクトルの問題を各グループで自由に実験中だった。この授業は、日本の学校とずいぶん違い、自由でうらやましい環境の中での学習であった。こういった学習環境の中から「創造性」が生まれてくるのではないかと感じた。

それぞれの見学の後ホテルの会議室で各教師が見てきた印象なり感想なりを述べ合った。学校のシステムの違いやカリキュラムの違いなど、また教科によっては日本ととらえ方が違う点など、さらに教師と生徒との関係など様々な観点から意見の交換がなされた。

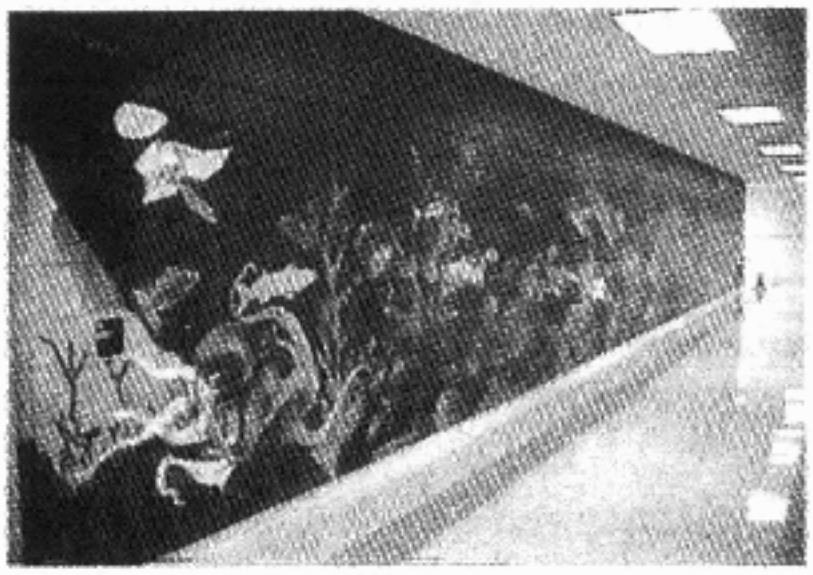
8月20日、21日、22日

校種別、学校別に分かれて、それぞれの研修を行う。

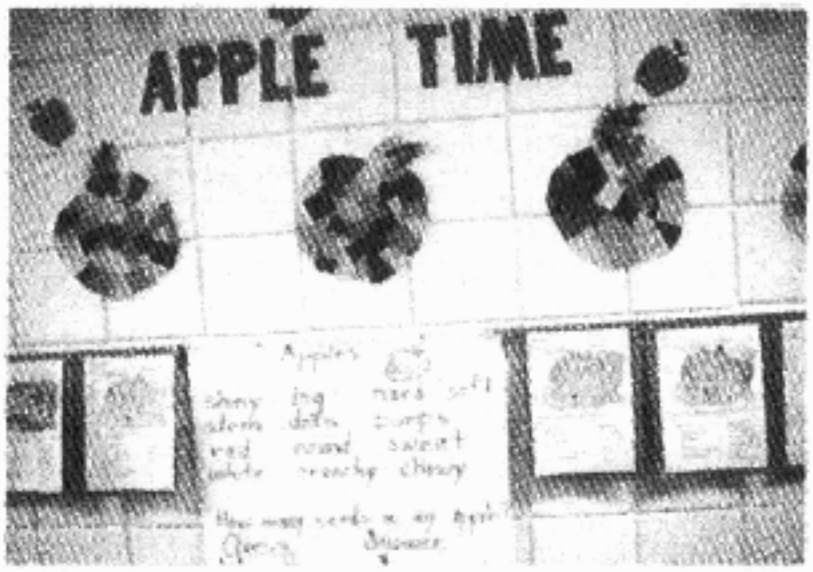
小学校の教師3名は、ウィルアムソン小学校にて研修を行う。

＜20日（火）＞

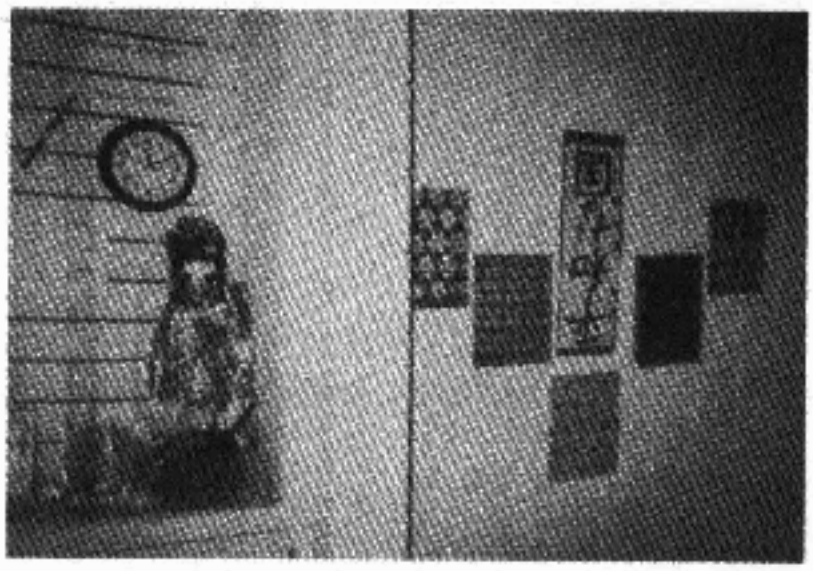
新学年が始まって5日目の中、丁寧な案内のもといろいろな教室や施設を見学させていただく。児童数560人、教師の数35人、スタッフも含めると総勢80人ということである。スタッフは、ベンキ担当者、ガーデニング担当者、掃除担当者など細分化されている。この学校も前日訪問した学校と同じく全館エアコンが効いていた。新設されて4年目の学校でとても清潔できれいである。午前中は3年生のテストがあったので、全校の子どもたちへの日本人教師の紹介は、午後2時からとなる。午前中は、学校内の見学をしながら話を伺



子どもたちが描いた廊下の壁の絵



教育を象徴する「リンゴ」の掲示物



姉妹校から送られた品

スクールバス

う。校舎内の壁に見事な絵がペインティングされていた。壁の絵は一年ごとにかきかえられるそうである。

廊下には、子どもの作品が飾られていた。日本の姉妹校から送られてきたという児童の作品もたくさん掲示され、交流3年目で密接な結びつきが非常に感じられた。

廊下で行き交う子どもたちは、日本人の教師にむかって「こんにちは」と日本語であいさつしてくれる。とても親近感をもっているまうである。ここでもやはり、廊下は色別に組み込まれたタイルの上を一列にならんで歩いていた。トイレも廊下で一列にならんで待っていた。そして、騒がしくなると、唇に人差し指をあてて「シー」とささやき合っている姿が印象的だった。

図書室は、メディアセンターとしての機能は十分に備わっていた。書物はもちろんのこと、コンピューターの貸し出しワゴン、数々のビデオ、パソコンに組み込まれたビデオ視聴時間の予定表など驚くべき充実ぶりである。学校図書館司書が授業もされるようである。古くなった図書の本を売ったり、新しい本を定価で販売し、その利益を図書室の予算に組み込むという話であった。この点は、日本とは全く違った面で、うらやましい反面、金銭面での苦労が想像できた。

当日は、在室されていなかったが、'school psychologist' が一校に一人配置されているそうである。

音楽の授業や、3年生のテストの風景も少しみせていただく。

校庭にはスクールバスが止まっていた。身体障害児用の特別仕様のバスもあった。バスがきれいに掃除されているかのチェックは副校長の仕事で、それを評価した紙がそれぞれのバスの運転席に置かれていた。

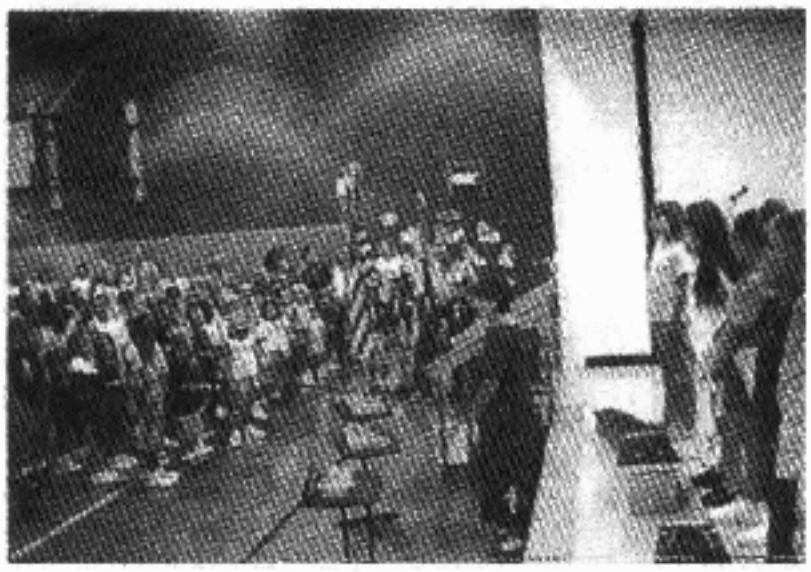
外には遊び場もある。休憩時間は昼食後の20分である。全員が一斉にでるのではなく、昼食の終わったクラスから外で遊べるようである。そのタイムスケジュールは各クラスごとに学校で決められている。

各先生用のメールボックスがあり、そこに各々の先生方の郵便物が配られる。また毎週、校長が学校の先生方にしてほしい内容を書いたメールも入れられる。

教室は、日本の教室の倍以上はあるように感じた。じゅうたんの敷かれている部分では、子どもたち全員が座って先生の話を聞き一斉指導をうける。個別の作

車で登校してきた子どもを迎える教師

車から降りて校舎入り口に向かう子ども



歓迎集会

業になると個々の机にもどって学習するというパターンがあるように感じた。

国語の授業では、リーディングと文法の時間に分かれているらしい。カリキュラムは、ノースカロライナの州のカリキュラムが採用されているそうである。

午後2時からは、歓迎会ということで全校集会が体育館で催された。日本人教師のあいさつのあと、子どもたちによる日本の曲「七夕さま」の楽器演奏と合唱がなされた。2回目の楽器演奏「七夕さま」では、日本人教師も一緒に日本語で歌った。子どもたちは檜上に飾られた笹に自分たちの願いごとをかいた短冊を飾っていった。

＜21日（水）＞

早めに学校に到着して子どもの登校の様子を観察する。保護者が、車で学校まで子どもを送り届け、担任教師が玄関前で引き受けるという感じで、安全面では徹底しているなあと感じる。4年生の1クラスで個人的なプログラムをさせていただく。

“end of year” について伺う

子どもたちは年度末に行われるテスト（end of year）に合格しないと進級できない。そのために、学年の最初のこの時期に、「その子」のどこを重点的に一年間指導するべきかのチェックテストがなされる。このチェックテストに際して正確さ（えん筆の本数、教室内の掲示物、子ども同士の机の間の距離など）が欠けていないかを検査するスペシャリストが学校に派遣される。当日はそのスペシャリストの方が来校しておられた。そして教室内をチェックされていた。

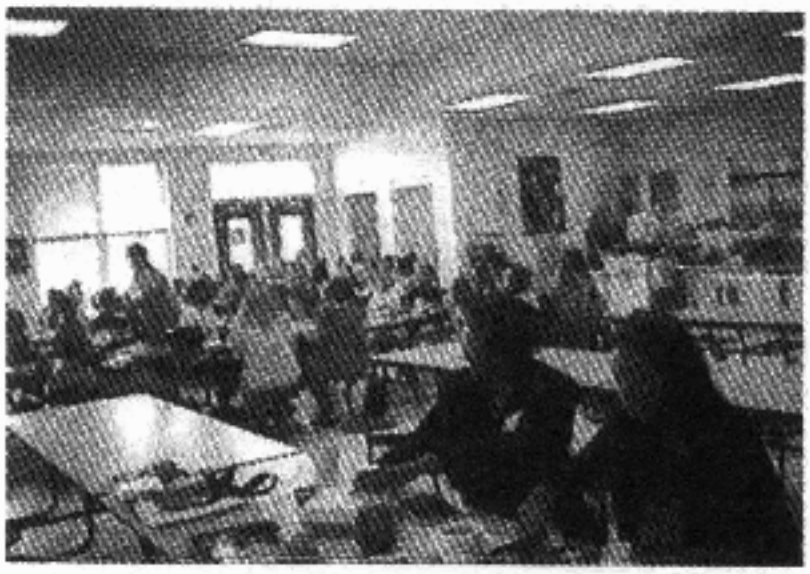
このテスト（end of year）での学校到達目標を決め、その目標がクリアできたら副教科の授業時数も増やしていこうと職員会議で決められたという話であった。

テスト（end of year）の問題点としては、テストにばかり目がいって、ほかの内容や教科が軽視されてしまうという話である。

参観させていただいた授業についてだけみれば、創造的な授業よりも教師が教え込んでいるような授業が多いように感じた。

昼食は、ランチルームで子どもたちと一緒に食べる。子どもたちは前日に当日分の献立の放送を聞き、学校のランチをとるか自宅からお弁当を持参するかどうか決めてくる。学校でランチを買う場合は、ビュッフェ形式で自分の好きなものだけをとってレジで精算をする。1ドルもあれば買える。メニューの中には、クッキーや、ケーキ類、スナック菓子などもあり、日本の給食の感覚とは全く違う。食事中は、立ち歩くということはない。トレーを返しに行くときに、立ちながら食べていても注意はされなかった。しかし、食後、廃棄用のお皿の底に穴を開けてお面をつくっていた児童が注意を受けていた。事情は詳しくはわからないのだが、この場合注意を与える場面が日本人教師とは逆だと感じた。

午後からは、Kクラスの授業、スペシャルクラスの授業、を参観する。



カフェテリアでのランチ

Kクラスでの授業風景

参観させていただいたスペシャルクラスの子どもは、障害のある子どもたちで、3グループに分かれてそれぞれの障害に応じたプログラムで主に個別の指導を受けていた。ここも日本とは違って、その個に応じた教育を与えていると感じた。ＥＳＬの授業では、一人のメキシコからきた女の子が、英語の授業を受けていた。

水曜日は、職員会議の日であるが、この日は日本人教師を迎えての交歓会がもたれた。日本側からの自己紹介のあと、ウィリアムソン小学校側から個人に対してプレゼントをしていただく。日本からは日本文化を伝えられるような品を持参し、それらの品々を全職員に紹介してもらう。そのあと、簡単な立食パーティとなる。

図書室での交歓会

＜22日（木）＞

この日は、「自分のクラスに授業参観に来てください」という教師側の希望がたくさんあったようで、Kクラスから2年、3年、4年、5年と分刻みでたくさんの授業を参観させていただく。その合間をぬって、自分たちのやりたいプログラムや、聞きたいプロジェクトにそって散っていくという慌ただしさであった。「来てください」と積極的に言っていただいた先生方の授業は短時間ではあったが内容の濃い授業であったように思う。指導技術的な部分でとても参考になった。また飛び入りで授業にも参加させていただいた。音楽や図工の専科の先生から各教科とのつながりについての考えを伺いながら話をしていただいた。時間の制限でやむなく話が途中になってしまったのは残念であった。

パソコン担当の先生からうかがった、2年生の「メキシコプロジェクト」の学習は、まさしく日本で今行われている総合的な学習そのもので、とても参考になった。リーディングの授業に始まり、パソコンをつかってそれぞれの興味関心に応じてリサーチし、グループごとにまとめていく。'Ａｒｔ' の時間にも「メキシコ」にそって教え、遠足ではメキシコ料理を食べに行

く。近くの図書館のメキシコに関する展示を見に行き、そこで係りの方から話を聞く。そしてゲストティーチャーからメキシコの生の話を聞いていく。評価については、グループでも個人でもそれぞれでなされていた。

最後に折り紙の紹介をし、カエルや紙でっぽうを作った。子どもたちと過ごした楽しいひとときは、あっという間に終わってしまった。

放課後には、学年会議の様子を見せていただくこともできた。「次週の打ち合わせ」「子どものつまずき」など、日本でもしているような内容がたくさんあったように思う。

参観を通して思ったことは、日本人教師が説明する「総合的な学習」「プロジェクト学習」がうまく伝わらなかった背景に、ノースカロライナでは、すべての教科がクロスカリキュラム的に配置されていて、教師の意識の中にそういったことをとりたてて考えるという感覚がないからではということである。この点は、これからの日本の教育のカリキュラムを考えていくとき参考になる。教科として固定的にとらわれずに意識的にクロスさせるそういった姿勢も日本の教師には大切なのではないだろうか。

＜Mrs. Watkins' Fifth Grade AIG Class 作成（August 2002）本 より＞

学　年	人　数	クラス数	教師数	主　な　学　習　内　容
K	94	4	4＋4	色・形・文字・数
1	87	4	4＋4	ひき算・右・左・たし算・writing・reading
2	89	4	4＋4	たし算・ひき算・reading・life cycles of plants and animals etc.
3	99	5	5＋2	かけ算・poetry reading・the scientific method etc.
4	83	4	4	かけ算・simple machines・long division・language・reading etc.
5	94	4	4	小数・アメリカの歴史・reqding comprehension・higher order thinking skills etc.

（＋数はアシスタント教師数）

＜5年生　日課表＞

8：00 a. m.　スクールバスまたは自家用車で登校　朝食を食べに行くか教室へ
8：10　the Pledge to the United States flagを言う　朝の放送を聞く
8：15－9：15　算数（一部の子どもだけAIGクラスへ）
　AIGクラス：特別クラス。4・5年生のみ。他の子どもよりも早く進む。
　Communication Skills・Mathの授業がある。専任の教師がいる。
9：15－11：30　communication skills (practice reading, writing, language, higher order thinking skills)
11：30－12：10　社会あるいは理科（交互に）
12：10　昼食（school cafeteriaで）
12：45　休憩時間（運動場に出る）→運動場：K・1用、2・3用、4・5用の3つある。
　K・1には遊具、2・3用、4・5用にはアスレティック的な遊具が備わっている。
1：05　Literacy Circles (read, discuss, activities about novels or articles from magazines)
2：10－2：55　resource class (P. E., music, art, computer lab, library, or guidance)
　Resource Classes：P. E. →soccer, volleyball, Frisbee, or run 専科の教師がいる　週1時間
　music → 専科の教師がいる　週1時間
　art → 専科の教師がいる
　gaidance → social skills, study skills, conflict resolution (playing games, reading books, watching movies, doing work sheets)　専科の教師がいる
　computer lab →専科の教師がいる
2：55　下校の放送　バスなどで下校

※DARE "Drug Abuse Resistance Education"：DARE officer (Sheriff Department) が教える。
　一年の最後に "a DARE Graduation" がある。

8月23日（金）

7人で4日間の学校視察を通して思ったことを出し合い、全体を通して見えてきたこととして纏めていく作業にかかる。

5時過ぎから'Pig pickin'に招待していただき、歓談する。食後、フットボールの試合に招いていただく。

帰着後、まとめの作業の続きをする。

8月24日（土）

各ホームステイ先の方に迎えにきていただく。

個人的な興味から、日本食の紹介をしようということで、お好み焼きを作ることにする。出汁になるものは日本から持参して行くが、材料となる豚肉、小麦粉などを途中のスーパーで買う。無人のレジの所をわざわざ紹介していただき、やり方を教えてもらいながら自分で精算をすます。

昼食にお好み焼きをつくるが、キャベツがとても堅くてうまくできなかった。6人のうち半数は、かつおや、削り節の生臭さが苦手なように感じられた。これも異文化体験ということで、許していただこう。夕方からは、ホームステイ先の娘さんの友だちの結婚式に一緒に参列させていただく。ビーチでのめずらしい結婚式であった。帰宅時には、車の中で月を見ながらご主人の美声を聞かせていただき、気持ちよいドライブを楽しませていただく。

8月25日（日）

午前中は、ホストファミリーと一緒に教会に行く。第一部は、牧師さんのモザンビークでの宣教師活動の話。話すというより、演説に近いようなすごい迫力である。内容はよくわからなかったが、紛争、飢え、病気などの話でその後には、現地で撮影してこられた写真を前の2つの大きなスクリーンに映し出されていく。映像のあと4人の方が、現地の報告をされた。それを聞きながらすすり泣き、涙を流す人々が多数いた。それまでにみてきた「多量のゴミとなっていく食べ物」「無分別にすてられるゴミの山」を思いだし少し複雑な気持ちになった。

第2部は、こうした高揚した気分の中で、急にはじけたような音楽。神の元で救われるというような内容の歌を楽器の演奏とともにみんなでうたい、陽気に踊っておられた。その様子は、驚きとともに、宗教の違いを感じずにはいられなかった。

午後、ローリーに移動。

8月26日（月）

Summary Conference. 広島地区、大阪地区、鳴門地区の順で発表を行う。

大阪地区の発表内容の概要は

①子どもは子ども……ノースカロライナの子どもも日本の子どもも同じ

子どもは、守ってやらなければならない存在。

授業中の様子。

②しっかりしてまっか?

仮説「日本とノースカロライナの教師の自立性に対する重点の置き方が違うのではないか」

③何めざすん?

日本→人格形成的な部分に重きを置く

ノースカロライナ→アカデミックな部分の到達度に重点を置く。

この仮説の検証のためには今後も交流が必要となってくるであろう。

8月27日（火）

エクスプローリス中学校（チャータースクール）の見学。3，4人のグループごとに生徒が案内してくれる。この学校では、今まで見てきた学校と違って、わたしたちが感じる自由があるように感じた。私立の学校で、"The shool of excelence"に選ばれ助成金もでているという話であった。生徒はくじで選ばれるといっていたが、スクールバスがないので、保護者の送り迎えが可能な家庭となってくるのとある程度のレベルの家庭の子どもたちだと思える。授業の内容も環境問題など問題解決学習のような学習形態をとっている場面もみれた。また生徒が学校の外でグループ学習をしている場面にもでくわした。

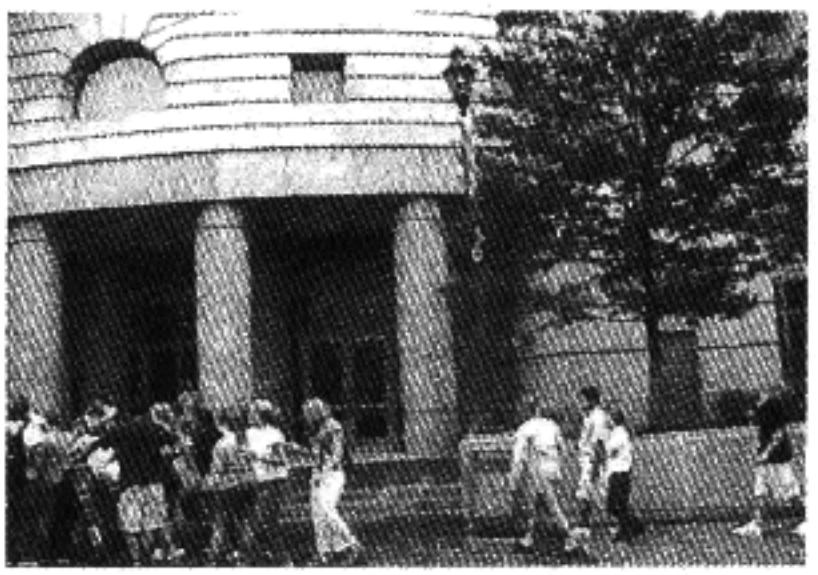
それまでみてきた学校とは幾分違うように感じた。

午後、博物館、教育委員会を訪問。カリキュラムの説明などを受ける。

8月28日（水）

デトロイトより帰国。

最後に、今回のグローバルパートナーシッププロジェクト参加に際し、いろいろとお世話なった先生方に大変感謝しております。紙面をおかりしてお礼申し上げます。



自然史博物館

州教育委員会